史蹟史料部

2024 年 3 月 20 日

#51

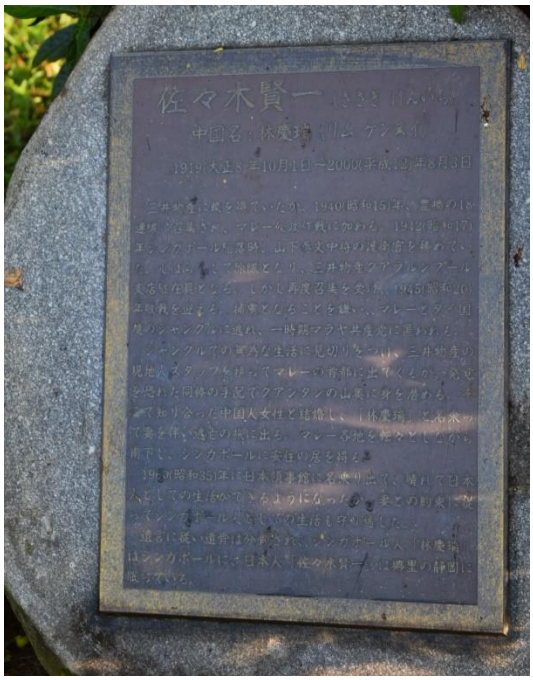
日本人墓地公園　ニュースレター

佐々木賢一の顕彰碑

昨年の 5 月、シンガポールの若いアーティストの作品をサポートしていらっしゃる日本の芸術センターの方から、メールにて問い合わせを受けました。

日本人会発行の書籍「南十字星創刊 10 周年記念復刻版」556 ページに「中国姓で生き抜いた 30 年　2 人の元日本兵が戦争で失った“時間”」というインタビュー記事が載っている佐々木賢一（ささきけんいち）、またの名を林慶瑞（リム ケンスイ）という男性についての問い合わせでした。

日本人墓地公園のメモリアルプラザには、佐々木賢一の顕彰碑があります。



佐々木氏は 1919（大正 8）年 10 月 1 日生まれ、静岡県出身で日本大学経済学部を卒業するとすぐ三井物産に入社しました。しかし 1940（昭和 15）年、豊橋の 18 連隊に応召、翌年中国に派遣され広東の軍司令部暗号手となりました。その後、インド進駐にともないサイゴンに転属、海南島、シンゴラ（タイ）上陸部隊、マレー侵攻作戦に加わりました。1942（昭和 17）年シンガポール陥落時、山下奉文中将の護衛官をつとめていました。

しばらくして除隊となり、以前の勤務先であった三井物産シンガポール支店、クアラルンプール支店駐在員となりました。

しかし再度招集を受け、1945（昭和 20）年終戦を迎えました。

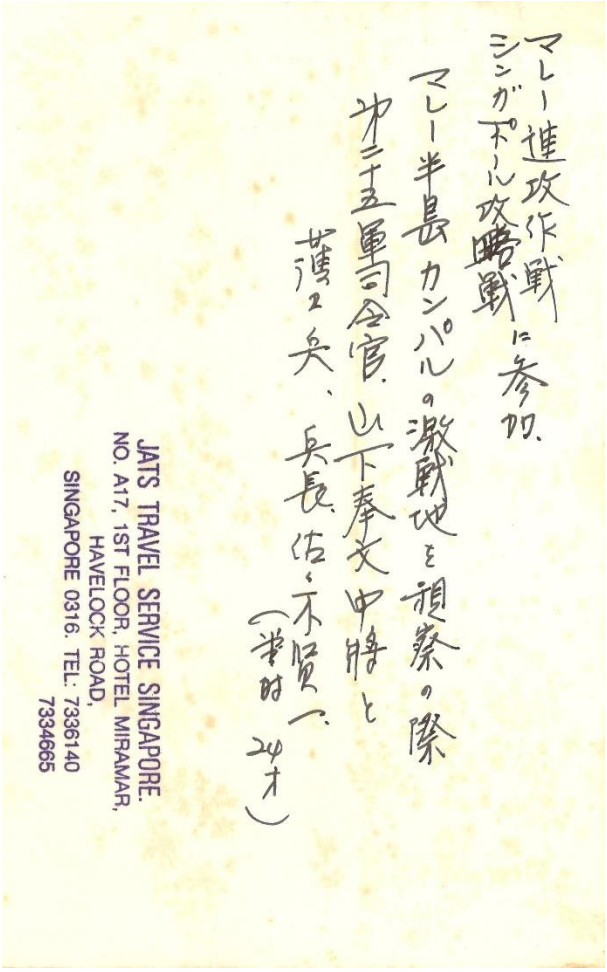
彼の数奇な運命が始まったのは、この時からでした。

これからの日本と自分を考えた末、佐々木氏は捕虜となることを嫌い、マレーとタイ国境のジャングルに逃れ、一時期マラヤ共産党に匿われました。やがて英国のマレーシア独立承認によって戦いの目標を失った佐々木氏は、日本への望郷の念が高まり、三井物産のローカルスタッフを頼ってマレーの首都に出ましたが、発覚を恐れた同僚の手配でクアンタンの山奥に身を潜めました。

そこで知り合った中国人女性と結婚し、「林慶瑞」と名乗って妻を伴い逃亡の旅に出た佐々木氏は、ある時は中国人に、またある時はマレー人になりすまし、時には日本人とわかって住宅を追い出されたこともありました。マレー各地を転々としながら南下し、やがてシンガポールに安住の居を得ました。

1960（昭和 35）年に日本領事館を訪れ、佐々木賢一と名乗り出て、晴れて日本人として生活ができるようになりました。

2000（平成 12）年 8 月 3 日、81 才で亡くなり、遺言に従い遺骨は分骨され、シンガポール人「林慶瑞」はシンガポールに、日本人「佐々木賢一」は郷里の静岡に眠っています。



写真の裏に書かれた佐々木氏自筆のメモ

（左）佐々木賢一　（右）山下奉文中将

ニュースレター#41 でご紹介した、ジョホール・バル日本人墓地に横たわる戦跡記念碑について、その建立の一部始終を目撃していたのも、山下奉文中将の護衛官を務めていた佐々木氏でした。

佐々木氏によると、この記念碑は陥落後に二十五軍の第五師団（広島）と第十八師団（久留米）の高級将校が山下将軍に揮ごうを求め、マレー半島からシンガポールへの渡河地点にそれぞれ建てたものの一つでした。発見され、ジョホール・バル墓地にあるのは第十八師団のものです。

1945（昭和 20）年 8 月の終戦と同時に日本軍がみずからの手で、忠霊塔などとともにこの記念碑も破壊したという記録が残っています。

「マレーの虎」山下将軍揮ごう

一九四二年のシンガポール陥落の際、日本軍を率いた「マレーの虎」山下奉文将軍が自ら揮ごうした渡河記念碑が、対岸のマレー半島南端の都市ジョホールバルで人目に触れないまま崩れかけている。これまでは、記念碑が現地社会に及ぼす波紋を気遣ってごく一部の日本人にしか知らされていなかった。だが、激動の世紀も終わりに近づき、ようやく歴史的事実に目を向けようとの動きが出てきた。（シンガポール　湯浅博）

マレーシア日本人墓地でひっそり

崩れかかる碑

史実「後世に」

この渡河記念碑は、シンガポールとジョホール水道で隔てるマレーシアのジョホールバルにある日本人墓地に、寝かされるように置かれている。記念碑は御影石製で、立てれば高さ三㍍、横一㍍、厚さ三十㌢になる。

記念碑は十五年前にジョホールバルの海岸で護岸工事中に偶然、掘り返され忘れ去られていた。

ジョホールバルの日本人墓地にある山下奉文将軍自ら揮ごうした渡河記念碑。コンクリートの台の上に寝かされている（湯浅博撮影）

恩讐越え目を向ける動き

佐々木賢一さん

記念碑は長年、熱帯の激しいスコールに打たれ、彫り込んだ揮ごうが「敵前渡河、戦跡記念碑」とかろうじて読めるものの、全体像がつかめなくなっていた。

目撃者健在

たまたまジョホールバルで日系企業の現地法人社長をしている渡辺紘さん(五九)が、人づてに聞いて「歴史的な記念碑であり、なんとか後世に残したい」と補修のための募金活動を思い立った。だが、この記念碑がいつ、どんないきさつで建てられたのかも不明だった。取材を進めていくうち、ことの一部始終を目撃していた人物がいまもシンガポールに健在であることが分かってきた。

一九四二年二月、第二十五軍を率いてシンガポール陥落を遂げた山下奉文中将の元警護官、佐々木賢一さん(八〇)である。佐々木さんは当時、二十五軍がマレー半島北東部のシンゴラに敵前上陸して以来、南下した一千㌔を山下将軍の側から片時も離れず、シンガポール陥落の決定的な瞬間に立ち会った数少ない証言者である。

佐々木さんは敗戦後もマレー半島に残って一時、マレー独立戦争に加担し、以後、十三年間もジャングルの逃亡生活を続けた。逃亡中に現地の女性と結婚し、「林慶瑞」という中国名をもつ数奇な運命の持ち主だ。

佐々木さんによると、この記念碑は陥落後に二十五軍の第五師団（広島）と第十八師団（久留米）の高級将校が山下将軍に揮ごうを求め、マレー半島からシンガポールへの渡河地点にそれぞれ建てたものの一つ。発見されたのは、十八師団のものだという。十八師団の実際の渡河地点は、さらに西に位置するが、見晴らしのよい場所が選ばれた。

記念碑には左側に「陸軍中将　山下奉文書」と署名があり、「昭和十七年　横山部隊」と彫り込んであると佐々木さんはいう。横山部隊は記念碑をつくった工兵隊の名称で、やがてニューギニアで玉砕する。

だが、一九四五年八月の終戦と同時に日本軍がみずからの手で、これら二つの記念碑をはじめ、当時、「昭南島」と呼称したシンガポールに建立した忠魂碑や昭南神社なども破壊した。

節度ある将

佐々木さんは山下将軍が忠魂碑の背後に、降伏した英軍の戦死者を慰霊する十字架をつくることを許可した人物であることを強調する。さらに、将軍がシンガポール陥落直後は、市街地には憲兵隊だけを投入して、報復にはやる二つの師団には待機を命じるなど節度を心得た将であったことを代弁し、突進ばかりの「威力誇示型」イメージを否定している。

◀◀ 邦人社長が募金活動

自動車税

環境庁は二十六日、自動車税などについて、窒素酸化物など大気汚染物質の排出の少ない車は現行の税額より三割安くし、排出の多い車は一割高くすることなどを内容とする来年度税制改正要望をまとめた。

シンガポールで再び佐々木賢一と名乗りはじめた後は三菱商事に勤め、その後独立して旅行会社を始めました。

長い流浪の旅で知った近隣国各地の地理と言葉が、佐々木氏の大きな資本となりました。

「戦争以来失った人生を、これから取り戻そうと思っています。戦争の傷跡を多くの人に見てもらい、亡くなった人びとをとむらうのが私の務めです。仕事を通じて日本とシンガポール両国の理解促進にお役に立ちたいと思っています。」

佐々木氏のインタビューは、このように締めくくられています。

1995 年 3 月 14 日 慰霊祭で墓地を訪れたと思われる佐々木賢一さん

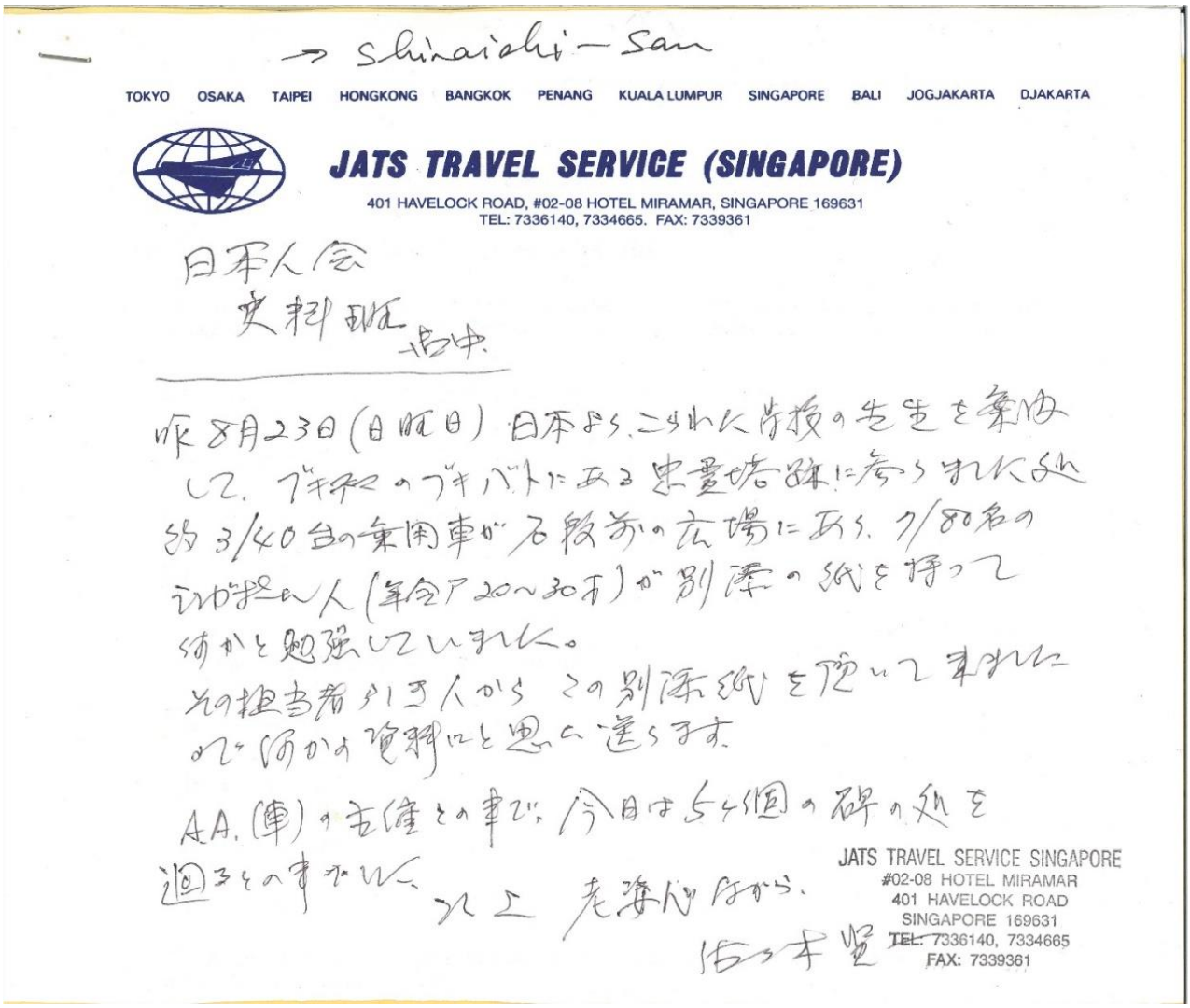
佐々木氏の旅行会社 JATS TRAVEL SERVICE （SINGAPORE）は、日本人会史蹟史料部員として長くツアーガイドを務めていただいた顔ゆうこさんが勤務されていた会社です。

電話で佐々木氏のことを尋ねた際、「あまり喋らない、物静かな方でしたよ」、顔さんはそう話してくださいました。

史蹟史料部が佐々木氏についてニュースレターをまとめるきっかけになったのは、冒頭に書いたように、日本の芸術センターの方からの問い合わせでした。その方がサポートをしている若いシンガポール人アーティストの作品に、佐々木氏が登場しています。

その作品は『百鬼夜行』（Night March of Hundred Monsters）というタイトルで、日本古来の精霊である妖怪をテーマにしており、百鬼には元日本兵やスパイが含まれているのだそうです。佐々木氏が百鬼のうちの１人として描かれています。

シンガポールの子どもたちは、戦争の歴史、日本の占領時代を学校で学びます。百鬼という表現は、シンガポール人から見た戦争のイメージの一端を垣間見ることができるのかもしれません。この作品は2023 年にドイツのフランクフルトで展示され、好評を得たそうです。


→ Shinaishi-San

TOKYO OSAKA TAIPEI HONGKONG BANGKOK PENANG KUALA LUMPUR SINGAPORE BALI JOGJAKARTA DJAKARTA

JATS TRAVEL SERVICE (SINGAPORE)

401 HAVELOCK ROAD, #02-08 HOTEL MIRAMAR, SINGAPORE 169631
TEL: 7336140, 7334665. FAX: 7339361

日本人会
史料班 佐々木

昨8月23日(日曜日) 日本より、こられた学校の先生を案内して、ブキマのブキバトにある忠霊塔跡に参られた処 約3/40台の乗用車が石段前の広場にあり、7/80名のいわゆる人(年令ア20～30才)が別添の紙を持って何かを勉強していました。
その指導者らしき人から この別添紙を頂いて来ましたので何かの資料にと思い送ります。
AA.(車)の主催との事で、今日は5ヶ個の碑の処を廻るとのことでした。以上 老婆心ながら。
佐々木賢

JATS TRAVEL SERVICE SINGAPORE
#02-08 HOTEL MIRAMAR
401 HAVELOCK ROAD
SINGAPORE 169631
TEL: 7336140, 7334665
FAX: 7339361

史蹟史料部に届いた佐々木賢一さん自筆の手紙